E・T・A・ホフマン『ネコのムル君の人生観』にみる女性像と愛の諸相[1]

鈴木芳子

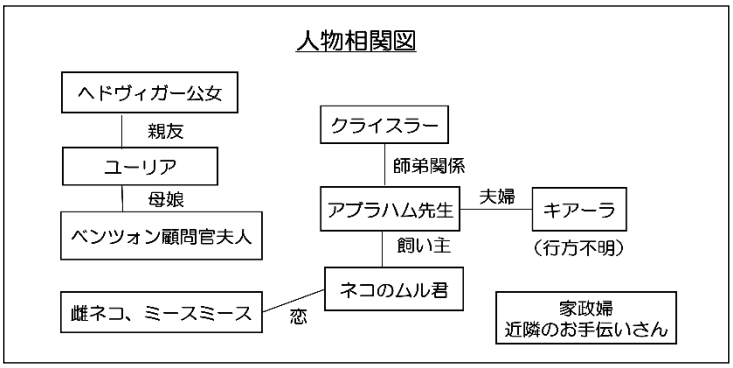
はじめに

E・T・A・ホフマン（1776-1822）の最後の長編小説、『ネコのムル君の人生観ならびに楽長ヨハネス・クライスラーの伝記の断編（はからずも日の目を見た反故紙）』（1820-1822）[2]は、架空の音楽家クライスラーの伝記（以下、「クライスラー篇」と記す）と彼の恩師アブラハム先生宅でひそかに読み書きを習得したネコのムル君が綴る自伝（以下、「ムル篇」と記す）が交差する二重小説で、女性たちの心情が細やかに描かれている。クライスラーとムルの両者に大きな影響を与えるキーパーソン、学者・奇術師アブラハム先生の自然力四大（水火風地）に対する畏敬の念と飽くことなき探究心は、人と人以外のものとの繋がりや不可視の力を重視したホフマンの創作姿勢と合致する。このことから本稿では、アブラハム先生の周囲の女性たちを自然力四大と関連づけて取り上げ、身分社会や家父長制の観点も加味して人物像とその愛を見ていく[3]。水（やさしさ、柔軟性）、火（情熱、戦い）、風（想像力、夢、未来）、地（安心感、現実的、地に足がついている）という一般的イメージと呼応する特徴をもつとはいえ、決してステレオタイプではない彼女たちがそれぞれの愛を希求する姿を探っていきたい。1、2、3 はクライスラー篇の、4、5 はネコの視点で描かれたムル篇の登場人物である。

１．水：Julia ユーリア

天性の美声と音楽の天分をもち、湖の白鳥もなつく心優しい純真な乙女として描かれる。宮廷楽長クライスラーが「芸術家の愛」[4]を捧げる女性であり、彼のミューズである。音楽という共通言語によって、二人の魂は深部で幸福な結びつきをみせ、彼女の歌は彼の指導のもとで目をみはるほど上達し、宮中の人たちを魅了する。幼馴染で親友のヘドヴィガー公女は、ユーリアの曇りなき心を前にすると、自分のことがよく分かるようになる（326）と述べ、アブラハム先生もユーリアと向かい合うときには、おのずと高潔で廉直な人となりがあらわれる。

いっぽう、ユーリアの母、三十代半ばの寡婦であるベンツォン顧問官夫人は栄達を求め、娘をイレネーウス公の長男で知的障がいのある若者 Ignatius イグナチウス公子（この名はラテン語で「火」を意味する）に嫁がせて宮廷を陰で操りたい。知力・言動ともに 6 歳児ぐらいのイグナチウス公子は思いやりのあるユーリアを無条件に慕い、彼女のほうでも彼が危険で残酷な児戯におよんだときはきちんと叱るなど、つねに利己心なき愛を彼に注ぐ。ベンツォン夫人の「やさしいいい娘ね。いつもあるべきあなたそのものでいてちょうだい」（287）という文言は、娘の美質を称えて倫理を説くいっぽうで、娘を支配・コントロールして自立を阻む呪縛の言葉でもある[5]。男性が立身出世のた



めに娘を人身御供として差し出す例は数多あるが、夫人もそのやり口を踏襲し、娘を自分の野望を果たすための道具にしようとしている。ここでは母の庇護なくして生きられない若く従順なユーリアの〈水鏡の乙女〉としての受動性が弱みとなる。

２．火：Hedwiger ヘドヴィガー公女

イグナチウス公子の妹で、その名は語源的に「戦い」の意をもつ。ヴェスビオ火山の炎を思わせる輝く瞳を持ち、幼児期のトラウマ[6]に苦しむ16歳か17歳の繊細な少女として描かれる。明敏な公女は歌唱レッスンの際にクライスラーが語った「芸術家の愛」に大いに感銘を受け、ひとまず心の安らぎを得るが、その直後に、彼女にとって官能の化身ともいうべきヘクトール公子が現れる。

彼女の父親イレネーウス公が決めた婚約者ヘクトール公子は王侯君主の次男でナポリ公国の将軍、恋の手練手管にたけた美丈夫である。誇り高く理知的なヘドヴィガー公女は、彼の〈自分になびかない女はいない〉という思考回路と美辞麗句を巧みに躱す。それでもダンスを好む公女は、彼の舞踏の申し出を受け入れて優美に踊る。ところがナポリの民族舞踏の真っ最中に彼に激しく胸に抱きしめられると、公女は彼の腕のなかで失神し、息を吹き返した途端に、彼を強く拒否する。しかも発作を起こしたのは、「公子がとつぜんドラゴンのような怪物に変身し、尖った炎の舌で心臓を一突きした」せいであると主張する（211）。この長編小説の末尾で、兄嫁への愛欲ゆえに兄を殺傷したヘクトール公子の血塗られた過去が明るみに出る（452）が、ここで早くも公女は愛と死の欲動のみならず、初対面の魅惑的な貴人がまとう忌まわしい犯罪の余臭を鋭く感じ取っている。公女はデモーニュシュな力に途方もなく惹かれると同時に、おぞましさをおぼえ、愛の欲望と慄き、情熱と怯え、受容と拒絶のはざまで揺れ動き、内なる葛藤はさらに続く。そのうえ公女はヘクトール公子が熱烈に恋しているのは婚約者の自分ではなく、心友のユーリアだと気づいている。「怪物の炎の舌」「心臓を一突き」という表現が示すように、ホフマンはフロイトに先立ち、私たちの心の奥底にまどろむ名状しがたいもの、エロスとタナトス、理性では解明できない愛と情熱の深淵に目を向け、禍々しくも扇情的な男性と対峙する乙女の不安と混乱を浮き彫りにした。

心に熾火を宿す公女の鋭利な多感さは周囲から理解されず、気難しい病気がちの女性とみなされ、彼女を早く嫁がせたい旧弊な父イレネーウス公は、王侯貴族らしい礼儀作法が眼中にない風変わりな娘（336）に手を焼いている。

３．風：Chiara キアーラ

社会的差別をうけていた少数民族ロマの娘で、イタリア語で「明るい、輝くような、光に満ちた」という意味の名と予見能力をもつ。奇術師セヴェリーノは8歳の彼女をほぼ8年にわたって監禁し、音響学を利用して彼女の声を神託とする演目「姿なき少女 das unsichtbare Mädchen」で莫大な利益を得ていた。社会的に抹殺され、声のみの存在であることを強いられていたこの美少女は、セヴェリーノの死後、アブラハム先生に救出されて結婚するが、とつぜん彼の前から姿を消す。後年、彼女が老女マグダラ・シーグルンとしてナポリに現れたときには、容貌が激変し、異様にぎごちない動作で人目を引くほど体が不自由になっている（449-450）。かの特殊能力ゆえに拉致され、魔女とみなされて拷問にあい、偽名を使って異国で生き延びるほかなかったと推測され、ホフマンは迫害の惨さを言外に匂わす。彼女の予言は、神がかりの巫女になって霊を呼び出すのではなく、その豊かな感受能力と洞察力によって、懊悩する者の意識下の願望を見抜いて明示するものである。また、彼女が後年そなえた治癒力は、それをさらにパワーアップさせて、病者の弱々しい生命の炎に働きかけて自己治癒力を活性化させたもので、深い共苦（Mitleid）の発露といえよう[7]。キアーラは苦しみのあまり衰弱したヘドヴィガー公女に回復力を授け、再び姿をくらますが、彼女の大いなる愛は公女にとって意識下の闇の世界に一条の光をもたらすものとなる（218-220）。

４．地：家政婦、お手伝いさん

ムル篇では身分社会や家父長制的規範から自由な詩猫(しびょう)が、日常生活において見落としがちな意義深いものに光を当てる。身分社会の下位にあって家内労働に従事するこの二人の女性は、ムル篇のなかでも端役で、ほんの数行しか登場せず、名前ではなく職業で呼ばれる。それどころか家政婦の台詞は一言もない。しかしムルは、〈名もなき目立たぬ〉存在である彼女たちの高い仕事能力や五感全開でなされる非言語コミュニケーション能力を見逃さないばかりか、当時五感のなかで下位に位置付けられていた味覚・触覚の悦楽を軽妙な筆致で描き出す。

ムルは、最近の作家たちの作品と、アブラハム先生の年配の家政婦が供する滋味豊かな料理を比較して、プロフェッショナルな技という点において後者を称える（240)。また、彼と同じ建物に住む親切なネコ好きのお手伝いさんは、ムルのボディーランゲージを読み取る達人で、ムルが他のネコたちに美味なミルクを振る舞いたがっていることを瞬時に察して願いをかなえてくれるばかりでなく、撫でるのが上手な彼女の手は彼に無上の幸せをもたらす[8]。忙しく立ち働くお手伝いさんにとっても安らぎのひとときで、両者は癒し癒される関係にある。ムルはこうした日頃の信頼にもとづく心の交流、そこはかとなく情味があってくつろげる関係（349）のおかげで、ネコ学生組合員たちに気前よくご馳走して好印象をあたえることができる。彼女たちの温かく堅実な愛が、ムルにとって大切な生の基盤である「食」とネコ社会における友情を陰で支えている。ホフマンは、ネコも人もこの世界で隠然たる力をもつ穏やかな愛の連鎖のなかで生き生かされていることを暗示する。

5. 水:雌ネコ、ミースミース Miesmies

ミースミースはムルの初恋の雌ネコである。彼女に一目惚れしたムルは愛の告白をした直後に、彼女の粗暴な従兄弟たちに下水溝につき落とされ、やっとの思いで逃げ帰る。事情を察したアブラハム先生は大笑いしながら、彼を何度も浴槽に突っ込んできれいに洗う。相次ぐ水難にムルは屈辱をおぼえるが、恋心をおさえきれず、ついに彼女と結婚する。ムルの恋の歓喜と痛み、および水難は、水の精ウンディーネ[9]がもたらす禍福のパロディーになっている。音楽を愛するムルは、歌が上手で艶めかしいミースミースに惑溺し、数々のラブソングを捧げる。しかし彼女は、恋によって創作力が高まる詩猫のもとには留まらず、ヘラクレスのように立派な体格の色男ハデオ、誠実なネコ学生組合員ムチウス、若く雄弁なヒンツマンというふうに、次々とパートナーを変え、しなやかに流れに身をまかせる。

奔放なミースミースは、清純でしとやかなユーリアと好対照を成すばかりでなく、「恋はあたしの幸福であり、誇りであり、生きることそのもの」（361）と明言する。ホフマンは人間社会の先入観や固定観念をコミカルに風刺したムル篇において、身分社会や家父長制における価値観に縛られない粋で自由な女性像としてミースミースを生み出した。歌で他者を魅了し恋に生きる彼女は、音楽とエロスを体現した〈新たなウンディーネ〉と言えるだろう。オペラ『ウンディーネ』（1816）を作曲したホフマンは、この世界を人と人以外の種との連続性のなかでとらえ、愛の悲喜劇をユーモラスに相対化してみせたと考えられる。

おわりに

クライスラー篇の女性たちが身分社会や家父長制と正面から向き合うとき、その愛はともすれば悲壮感や哀愁が漂う。しかし、自縄自縛に陥りやすい貴族の令嬢ヘドヴィガー（2）は市民階級の子女ユーリアに慰撫され（1）、社会的に排斥されたロマの女性キアーラがこの病める公女に救いの手を差し伸べる（3）。このことは、地位や身分を越えた真の友情と共苦が救済への道を開くことを示唆する。また、ムル篇にみる働く女性たちの何気ない日常的な営みに宿る情愛（4）や、生命力が煌めく恋（5）は、愛が人間同士のみならず万物を繋ぎ、生と連動して、この世界を活気づける不可視の力であることを伝える。

【テキスト】

E.T.A.Hoffmann: *Lebens-Ansichten des Katers Murr nebst fragmentarischer Biographie des Kapellmeisters Johannes Kreisler in zufälligen Makulaturblättern*, In: Hartmut Steinecke Sämtliche Werke. (6 Bände) Band 5. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt 1992. 同書を引用・参照する際は、括弧付きで頁数のみを示す。

【参考文献】

Gernot und Hartmut Böhme: *Feuer, Wasser, Erde, Luft. Eine Kulturgeschichte der Elemente.* Verlag C.H. Beck, München 1996.

【注】

1 E・T・A・ホフマン『ネコのムル君の人生観（上・下）』拙訳、光文社古典新訳文庫、2024 年。本稿は、〈クライスラーとふたりの少女〉〈アブラハム先生と「高次の魔術」〉における主要男性キャラクターとその愛（下巻・拙文「解説その二」426―437 頁）を踏まえて、アブラハム先生の自然観と愛の理念を要諦とし、主体的に生きる女性たちとその愛について新たに考察したものである。ホフマン文学における女性像をテーマとした主な研究として、当時のファッション業界のスペシャリスト、婦人帽製作者を扱った中村茂裕「E・T・A・ホフマンの文学作品における女性像 ―ジアチンタ・ソアルディー―」大阪産業大学産業研究所所報、第 12 号（1989）や、合理的思考の持ち主と知性なき自動人形とを対比させた同氏の「E・T・A・ホフマンの文学作品における女性像その 2―『砂男』におけるクララとオリンピア―」大阪産業大学論集（人文科学編）、第 73 巻（1991）が挙げられる。

2 デュムラー社から第一巻は 1819 年 12 月、第二巻は 1821 年 12 月に刊行されたが、発行年はそれぞれ 1820 年、1822 年として印刷されている。

3 自然力四大にたいする科学的知識を駆使し、みずからをシェイクスピアの『テンペスト』に登場する魔術師プロスペローになぞらえ（31）、„Denn in mir glühte alle Liebe,die der ewige Weltgeist selbst ist“（424）と表明するアブラハム先生にとって、「愛」とは「世界を活気づける永遠の霊力」である。深田甫はアブラハム先生の Weltgeist をロマン派が好んで取り上げた Weltseele と関連付けている。『ホフマン全集 7　牡猫ムルの人生観』深田甫訳、創土社、1971 年、781―782 頁参照。

4 世間的な恋愛や結婚とは異なる愛。クライスラーによれば、<真の芸術家は真に愛する人に向かって見えざる精神の触手をのばし、詩・音楽・絵画といった芸術作品を創造するだけで、愛する女性を所有することは望まない>（173-175）。彼の音楽に寄せる不滅の愛と天上的な高みをめざす永遠の憧れは、ユーリアという地上的存在において安らぎと創造の源を見出す。

5 「優しくて恐ろしい母」という両面性について：カール・グスタフ・ユング、林道義訳『元型論』紀伊國屋書店、1999 年、108 頁参照。強かで知略に長けたベンツォン夫人については別稿を期したい。

6 宮廷画家エットリンガーはヘドヴィガー公女の母である公妃への愛のために狂気におちいり、幼い公女の喉元に手をかけたことがある。クライスラーの相貌がそんな彼に酷似していたせいで、公女の胸の奥底に深く沈められていた恐怖体験が蘇る(168-173)。

7 想像力と共苦および良心の働きについて：太田匡洋「ショーペンハウアーにおける共苦と想像力」、『倫理学研究』48 号(関西倫理学会編)、2018 年、90―100 頁参照。

8 この箇所は、ゲーテ『ファウスト第一部』における学生の「土曜日に箒をあやつる手が、日曜日にきみをいちばん上手に愛撫してくれる」（844―845 行）という台詞のもじり。ムルの表明は、家事手伝いの女性（Hausangestellte）を一過性の軽い恋愛遊戯の相手とみなす学生の驕りに対する諷刺でもある。

9 フケーの中編小説『ウンディーネ』（1811）が有名で、ホフマンのオペラ台本もフケーが執筆している。